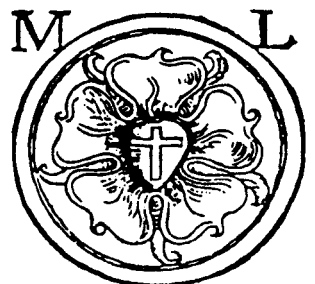


ルター 新聞

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr.69

Die Luther Zeitungs



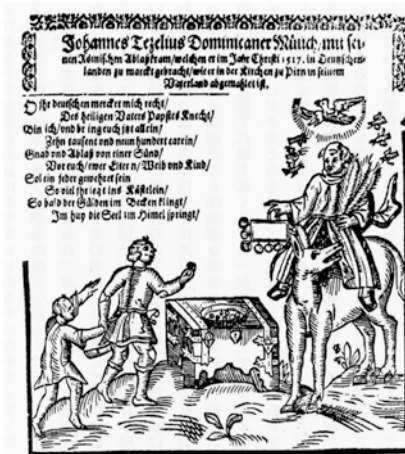
▲ 1517年に印刷された「95箇条の提題」

▲父ルカス・クラナッハの彩色木版画「修士ルター」

95 箇条の提題で 宗教改革の火ぶたは切られた

五百年前の宗教改革を記念するのか、あるいは五百年目の宗教改革の年を迎え改革を進めるのか——原点を確かめ、現在に展開する。これがわたしたちの今年の宗教改革の迎え方だろう。

ちょうど五百年前、その十月三十一日にマルティン・ルターはのちに「九十五箇条の提題」と呼ばれるようになる「贖宥の効力を明らかにするための討論」を求



▲贖宥符を売るヨハン・テッツェル

今号の内容

- 2面 宗教改革を「祝おう」
- 3面 「九十五箇条」を
読んでみよう
- 4面 ルターセミナー報告
- 5面 ルターと宗教改革の
本を読もう！
- 6面 九七箇条の提題
切手シリーズ
「ルター訳聖書2」
- 7面 ルンドからナカサキへ
- 8面 研究所ニュース

めて、自らの信じることを世に問うた。これを契機に、教会の悪しき慣習を巡る議論が、否、人はいかにして救われるのかという福音の核心を巡っての根源的な問いとそれに関するルターの聖書に立った所説とが燎原の炎のようにヨーロッパ中に広がった。その問いは今日もなお私たちに問い続けている。

(江藤直純)

宗教改革を「祝おう」

名誉教授 徳善 義和



「祝う」とはなにに

「宗教改革五百年」である。これを記念して「祝おう」という呼び掛けやかけ声が多い。何を、どのように「祝おう」というのだろうか。五百年前のルターはこんなことをした、あんなことをしたと数え上げて、これを賞賛し、感謝し、宴を設けることではあるまい。逆にルターにはこんな欠点、こんな問題があったとえぐり出して、祝いをぶち壊すことでもあるまい。

「祝う」とはルターと宗教改革の出来事を冷静に見詰め、その実績においても、問題においても学ぶべきを学び、批判すべきを批判し、それを五百年後の今の我々自身に問い返して、五百年前の改革の中心を今の教会と社会の中で、我々自身の課題として取り組むことであろう。浮かれ立つ「祝い」でなく、厳しい「祝い」だと心得たい。

「祝い」の中心に呼び掛けを聞こう

言うまでもなく、ルターが当時の教会に呼び掛けたのは、「恵みのみ」、「信仰のみ」、「聖書のみ」であった。我々の大学のチャペルに新しく与えられたオルガンが正面に高々と掲げているとおりである。「祝い」においてこれは掲げられ

るだけでなく、我々自身の信仰に呼び掛け、訴えている。この三つの訴えは、正確に読めばいずれにも「のみによって」と付して読むべきである。中世末のカトリック教会で、ルターのいた厳格な修道院で実践され、神学の最先端でも、人間の行いが先行し、神の恵みがこれを受容すると教えられていた。贖宥状（いわゆる免罪符）はその墮落の最たるものであった。詩編講義からローマ書講義へと進んで、ルターはそれとは逆の、神の恵みのみから人への、キリストゆえの賜物としての信仰のみが、神の前で罪人を義とし、生かすものとすることに注目させられ、宗教改革は当時の教会と神学の改革への大きな呼び掛けとなり、一方でこれに賛同する者たち、他方でこれに反対した当時のカトリック教会という対立を産み出した。この対立は固定化し、時には尖鋭化、また教条化して五百年近い歴史を形成してきた。

しかし、人間にとつての五百年は、神の目では瞬時ととらえてもよいだろう。二十世紀後半から最近に掛けてのカトリック教会の変化は、この呼び掛けに応えるものにほかならない。ルーテル教会としてはこれを歓迎しつつ、ただ喜んで

ただ喜んで

だけいることはできない。

問われているのは

我々ルーテル教会自身

カトリック教会だけのことではない。五百年記念にこれを問われているのは我々ルーテル教会自身である。「恵みのみ」、「信仰のみ」、「聖書のみ」の原点に新しく立ち返り、教会の宣教と社会的実践を現代のただ中で我々なりに実現していくことであろう。宗教改革五百年を「祝う」ことはほかならぬ我々自身、ま

ルター訳ドイツ語聖書・ガラテヤ人への手紙 原文・翻訳と解説

徳善 義和 訳著
日本聖書協会 一〇〇〇円＋税 本年六月刊行



ルターと賛美歌

徳善 義和 著

教文館 二四〇〇円＋税 本年七月刊



た自らの課題の気付きや実践につながらねばなるまい。カトリック教会との生きた交わりは、またキリスト教界全体への生きた問い掛けや実践につながることを求めているであろう。教会の一致を狭く組織的一致と考えるよりも、キリストを信じる信仰ゆえの一致への注目に新しく導かれていくことを祈りたい。これが我々の宗教改革五百年の「祝い」であり、この「祝い」がみこころに適って、祝福され、導かれることを祈りたい。

これこそ日本聖書協会の「宗教改革五百年記念出版」と呼ぶのにふさわしい。ルターがワルトブルク城で新約聖書をギリシャ語原典から十週間ドイツ語に訳したという『九月聖書』（一五二二年）の中から、ルターが愛してやまなかったガラテヤ書が、原文の持つルターの肉声の趣きさながらに日本語になって、私たちが読むことができるのです。徳善先生の尊いお働きに感謝。（江藤）

「賛美歌がルターから始まった」と言っても過言ではありません。会衆が自らの信仰を声に出して礼拝の中で歌えるようにしたのがルター。そのために自ら作詞作曲（教会讃美歌には十七曲所収）。詩編も、教会暦に合わせたキリストの生涯も、教理問答もみな福音的な賛美歌にしました。解説をエピソードや厳密な訳、歌いやすい口語訳、オリジナルの曲と共に、徳善先生が語ってくださいませ。（江藤）

「九十五箇条」を読んでみよう！

副所長 江口 再起

「九十五箇条」を読んだことがありませんか。誰でもが知っている有名な文章ですが、実は案外、実際には読まれていないのかも知れません（「九十五箇条」の正式名は「贖宥の効力を明らかにするた

めの討論」です。贖宥とは、いわゆる「免罪符」のことです）。さて、そこで「九十五箇条」を読んでもみましょう。四つの条項を選んでみました。

第一条 私たちの主であり師であるイエス・キリストが、「悔い改めなさい」と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである。

生です。しかし、それは神の前で恐縮することではありません。逆です。生涯のすべての時が、神様の祝福と恵みの下にあるということです。

日曜日の礼拝の時にだけ神様を思いだし、自分の生活を反省するのではだめです。私たちは生涯の一瞬一瞬、神様の前に立っているのです。一瞬一瞬が信仰の

第二十七条 箱の中へ投げ入れられた金が音が立てるや否や、魂が煉獄から飛び上がるという言葉たちは、人間（のつくりごと）を宣へ伝えているのである。

免罪符批判です。チャリンと免罪符箱にお金を入れるや、死後の魂が煉獄から天国へ行けるというのです。今日、免罪符など売っていませんからこの批判は用済みのようにみえるかも知れませんが、

第四十三条 貧しい者に与えたり、困窮している者に貸している人は、贖宥を買ったよりも、よりよいことをしているのだと、キリスト者は教えられねばならない。

すばらしい言葉です。私たちは免罪符を買ったり、アレコレ自分の救いのことを心配しなくともいいのです。神様が支えて下さるので大丈夫。それよりも貧し

い人、困っている人を助けましょう。この世界のすべての人と共に生きていきましょう。共生です。

第九十三条 キリストの民に「十字架、十字架」と告げる、あのすべての預言者たちはさいわいである。そこに十字架はない。

ルターの神学は「十字架の神学」といわれます。キリストの十字架とは、その意味するところは私たちが無償無条件で天国が約束されたということです。だから

このように「九十五箇条」には、免罪符批判や十六世紀当時の教会制度の批判ばかりが論じられているわけではありません。いやむしろ、今日の私たちに呼びかけている言葉の数々なのです。宗教改文館刊）に収録されています。



九五箇条の提題（1517年に印刷されたもの）。現在のB4くらいの大きさ。



(JELC 九州教区)

五〇〇年の年、ルターに出会う

ルターを多方面から学び、遺産を現在に活かす

「信徒と牧師のためのルター・セミナー」開く

(六月五日〜七日)

ルター研究所創立以来三十五年間欠かさず続けてきた「牧師のためのルター・セミナー」は宗教改革五百年記念の今年、「信徒と牧師のためのルター・セミナー」と銘打って、熱心な信徒の方々が多く集まり、総勢三十四名の参加者を得ました。

会場は例年通り三浦半島のホテル・マホロバマインズみうら。伊藤節彦牧師（広島教会）による開会礼拝で始まり、最初の講義は「ルターの生涯」。高井保雄所員（羽村教会牧師）が生い立ちから



講演する高井所員

晩年までの全貌を分かり易く描き出しました。夜は江藤直純所員の司会で「わたしとルター」についての自由な話し合い。二日目午前は先ず鈴木浩所長が『九十五箇条』を学ぶ」と題してテキストに即して贖宥（いわゆる免罪符）の仕組みも説明し、問題の核心を解説。立山忠浩所員（都南教会牧師）は「ルターと聖書」につき、ルターにとって聖書とはどのような語りだし、とくに誰が解釈するのかなどについて明らかにしました。午後は、美術史研究者の真下弥生先生を迎え、「宗教改革と美術」をたくさんの作品を示しながらの講義をいただき、そのあと、参加者の一人、音楽史研究者の加藤拓末氏（大森教会員）が「ルーテル教会の音楽遺産『コラール』について」と題して興味深い話しをしてくださいました。夜はまた江口副所長の司会で「わたしと信仰」のテーマで語り合い。三日目に「宗教改革五百年の意義とエキュメニズムの流れ」の鳥瞰図を石居基夫所員が示してくれました。豊かな交わりの中で、ルターの全体像を多くの視点から学び、自らの信仰を振り返る有意義なセミナーでした。（江藤）

信仰の原点に立ち返って

京都教会員 松澤 員子

今回のセミナーは信徒の参加に十分配慮してくださった内容だったと感謝しています。

このセミナーでの諸先生方の講義を通して、キリスト者ルターの信仰について多くのことを学び、自分自身の信仰に多くの問いが投げかけられました。なかでも洗礼を受けた前後には真剣に自分自身の内面に向き合い、自分の弱さや罪の現実を認め、聖書に聴き、十字架の主イエスのみ言葉、神の恵みに生かされていると確信した自分が甦ってきました。それはまた、隣人への愛の業に目覚めた時でもありました。しかし、聖日礼拝で罪赦されて生かされている恵みに気づき、感謝の思いを新たに送り出されても、多忙な社会生活の中で、日常的には、神のみ言葉に聴き、祈ることができていない自分に、このセミナーに参加して気づかされました。人生の秋を迎えている私ですが、ルターに学び、み言葉に生かされ、神の恵みに感謝して、自らのために、隣人のために祈る人でありたいとの思いを新たにすることができました。

最後に、快適な宿舎で夜遅くまで語り合った新たな友との出会いがあり、互いに祈りのうちに覚えてゆきたいと思えます。

ルターに倣い

生涯聖書と格闘しよう

大森教会牧師 竹田 孝一

宗教改革五百年を意識して、二〇一三年から大森教会では、「聖書を学ぶ会」で、ルター著作集の『ガラテヤ大講解』（徳善義和訳、聖文舎）を読み、今は下巻を読んでいます。「信徒と牧師のためのルター・セミナー」ということで、出席者に呼びかけて二名の信徒さんと参加することが出来、感謝しています。

「聖書を学ぶ会」に出席され、洗礼を受けられた音楽研究家で、バッハ、受難曲を研究しているK兄が出席されて、「ルーテル教会の音楽遺産『コラール』について」話をしました。これは、ルターを通して神さまの業だと感謝しています。また、ルターの翻訳をしているY姉ともお話が出来、信徒の賜物をいただきました。まさに「信徒と牧師のため」という言葉に相応しいセミナーでした。立山牧師の「生涯、ルターは聖書にこだわった」という言葉に刺激され、ルター自らによる最後の修正が行われた一五四五年版のルター訳聖書を訳すことが引退の近づいたルター派の牧師への贈物かと受けとめ、生涯、聖書と格闘していかうかと励まされました。

ルターと宗教改革の本を読もう！

新刊書案内

副所長 江口 再起

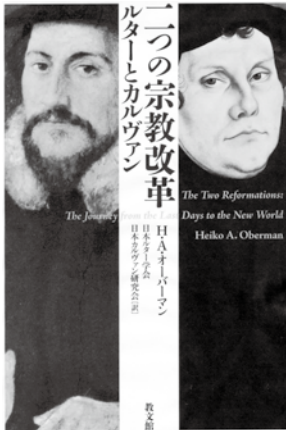
宗教改革五百年の年。ルターと宗教改革についての本が次々と出版されています。その中からいくつかの本を紹介してみましよう。

●金子晴勇『宗教改革者たちの信仰』(教文館)

●倉松功『宗教改革と現代の信仰』(日本キリスト教団出版局)

●H・オーバーマン『二つの宗教改革—ルターとカルヴァン』(教文館)

●江口再起『ルターと宗教改革五〇〇年』(NHK出版)



●小田部進一『ルターから今を考える』(日本キリスト教団出版局)

●シリーズ『わたしたちと宗教改革』(全五巻、日本キリスト教団出版局)

●江口再起『ルターと宗教改革五〇〇年』(NHK出版) NHKカルチャージャオ「歴史再発見」(一〇〜二月放送)のテキストブックです。



●深井智朗『プロテスタンティズム』(中公新書)

●A・E・マクグラス『ジャン・カルヴァンの生涯』(全一巻、キリスト新聞社)

●永山他編『旅する教会—再洗礼派と宗教改革』(新教出版社)

●W・カスパー『マルティン・ルター—エキュメニズムの視点から』(教文館)

●『義認の教理に関する共同宣言』(ローマ・カトリック教会／ルーテル世界連盟、教文館)

●『争いから交わりへ』(一致に関するルーテルローマ・カトリック委員会、教文館)

●『義認と自由—宗教改革五百年』(ドイツ福音主義教会常議員会、教文館)

●『W・カスパー『マルティン・ルター—エキュメニズムの視点から』(教文館)

●『争いから交わりへ』(一致に関するルーテルローマ・カトリック委員会、教文館)

ルター研究所が訳したり編集著作した三部作を挙げておきましょう。いずれもリトン刊。

●『ルター』エンキリディオン 小教理問答
●メランヒトン『アウグスブルク信仰告白』
●『キリスト者の自由』を読む

更にルター研究所では学術誌『ルター研究別冊五号』宗教改革五百年とわたしたち5』を準備しています(二〇一八年三月予定)。別冊一〜四号は既刊。また日本ルター学会でもやはり学術誌『ルターと宗教改革—五百年記念号(ルターの主要著作を読む)』を出版します。

そして教会からも本や特別冊子が出版されます。日本福音ルーテル教会からは、プレゼントブック『悩み多き人生に答はあるのか?マルティンに聞いてみよう』及び特別冊子『宗教改革五〇〇年』がでます。いずれも型破りの内容と体裁です。また日本ルーテル教団からは『現代に語りかけるルター』が出版されています。愉快でためになる小冊子です(入手は各教会及び教会事務局にお尋ねください)。なお最後に新刊ではありませんが最も土台となる二冊を紹介しておきましょう。『ルター著作選集』(教文館)と『ルターと宗教改革事典』(教文館)です。いずれもルター研究所の仕事です。

『九七箇条の提題』

所長 鈴木 浩

宗教改革は、マルティン・ルターが一五二七年一〇月三二日に、ヴィッテンベルク大学の町外れにある「城教会」と呼ばれていた教会の北側ドアに、一枚のビラを貼りだしたことがきっかけになって始まった。それが、いわゆる『九七箇条の提題』（正式名称、『贖宥（しよくゆう）、「免罪符」のこと）の効力をめぐる討論』である。

しかし、ルターは同じ年の九月初めに、『九七箇条の提題』と略称される『スコラ神学を反駁する討論』という表題の文書を明らかにしていた。『九七箇条』があまりにも有名なのに対し、この『九七箇条』はほとんど知られていない。

この文書は、「異端者に反対して語る際に、アウグスティヌスの言葉には明らかに言い過ぎがあった」という一般的评价に断固反対して、（そのように語ることは）「アウグスティヌスがほとんどどこでも嘘をついていた、と語ることに等しい」という過激な文章で始まっている。そして、九七本の箇条書きの文書で、一貫して熱烈なアウグスティヌス擁護の論陣を張った。

『九七箇条』は、宗教改革の発端になったという意味で、絶大な歴史的意義を

持っていたが、神学的には、『九七箇条』は、『九五箇条』よりもはるかに重大な意義を持つていた。後にルターが「奴隷意志論」（一五二五年）で明らかにする「意志の拘束状態」（神の絶対的正義の前では、人間の意志などは自由であるところか、奴隷的拘束下にあつて、取るに足らない、という）の主張が、『九七箇条』で先取りされていたからである。

人間に自由意志があることは明白である。しかし、ルターの眼差しは一点に集中していた。それは、「他ならないこのわたしの救いに関して、神の前で」という視点である。「神の絶大な正義の前では、人間の意志の自由などは、何の意味もない」というのがその主張であり、その結果、人間の救いは、ひとえに（神の）「恵みのみ」に依存している、ということになる。

ルターの神学的主張（つまり、人の救いに関わるルターの主張）はすべて、この「恵みのみ」にかかっていた。



切手に見るルター ②

ルター訳聖書 その2

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一

宗教改革 500 年の今年 1 月、ドイツで『ルター訳聖書』の記念切手が発行された。2017 年は、ルター訳聖書に関する 1522 年、1534 年、あるいは改訂出版された 41 年、45 年のいずれにも連がらないため、宗教改革 500 年に合せ発行されたものと思われる。図柄は、ルター訳聖書のあるページの部分コピーであり、欄外に多くの書き込みがある。聖書本文の字体は古いドイツ語文字（ひげ文字）で文字幅が太いため、近現代の印刷ではなく古い時代の印刷である。この聖書がゲーテンベルク印刷機によるものか、ルター時代までさかのぼるものかどうかは現時点では不明である。ドイツ切手の著名カタログであるミッヘルやドイツ郵便の解説を調べても、切手に印刷されている聖書の出版年については何も触れられていない。

切手を拡大して見てみると、聖書本文はマタイ福音書 27 章 12 ~ 19 節であると判明した。ルター以後も改訂を重ねられてきた現行ルター訳聖書とは異なる箇所がある。書き込みについては徳善義和先生に判断を仰いだ結果、ルターの筆跡に似てはいるが確証はないとのことである。興味深く謎の多い切手である。



ルンドからナガサキへ

— 宗教改革五〇〇年 ルーテル・カトリックによる共同記念

「平和を実現する人は幸い」について

所員 石居 基夫

【新しいことばを】

宗教改革五〇〇年を迎えた今年、世界中いたるところでそれを記念する行事が催されているが、なかでもルーテル教会とカトリック教会の合同の記念は、特別な意味を持っているといつてよいだろう。十六世紀には分裂して、互いに断罪し、争う関係となった両教会が、時を得て、この歴史を受け止めつつ、未来に向かう一致と共同を示しているのだ。

『争いから交わりへ』。このテーマこそ、五〇〇年目にして歴史を語り直すための新しいことばとなった。

昨年一〇月三二日にスウェーデンのルンドで行われた「共同の祈り」の礼拝



歴史的なルーテル・カトリック合同礼拝 (ルンド)

は、カトリックのフランシスコ教皇とムニブ・ユナンLWF議長による司式で行われた。今年の記念の意味が示されたのだ。第二バチカン公会議以後五〇年かけた対話の成果が、新しい時代を作るものとなるように、キリスト教会の全体の一致への道筋を示したのと同時に、世界に対するキリスト教宣教の使命を受け取っていく礼拝であった。

【日本での取り組み】

日本福音ルーテル教会と日本のカトリック教会は一九八四年から三〇年以上にわたる対話を重ね、神学的な相互理解を深めながら、洗礼の相互承認、共同での出版事業や礼拝などを実現してきた歴史をもつ。だからこそ、この宗教改革五〇〇年も特別な意味あるものとしようと、数年前から準備を重ねて計画してきたのだ。「平和を実現する人は幸い」。これをテーマとして、今年一月二三日に長崎は浦上天主堂にて、宗教改革五〇〇年の共同記念を行う。ルーテル側は教会の総会で、カトリックは司教協議会での決定を踏まえているので、この共同記念にはそれだけの重みがある。そして、こ

◀日本でのルーテル・カトリック合同礼拝が行われる浦上天主堂



れは単なる教会間の交わりの回復の喜びを超えて、今の世界と歴史のなかに両教会がキリストの教会として確かなメッセージ

ジを示していくことを目指しているのだ。対立から交わり、そして神と共にある共同・協働へという歩みそのものが、現代の世界に一つのメッセージになっていくと信じていたい。

【時代の苦悩に込めて】

現代世界は、一方には国と国、人々と人々が対立し、宗教的主張と対立を巻き込むようにして争い、殺し合う現実がある。また他方では、人間の文明が被造世界に大きな破壊と危機をもたらしているという現実もある。キリストの福音は、この世界の現実の只中に神の国の実現を告げ知らせる。そして、同時に、その恵みに応えていく人々の働きを産み出していく。唯一の戦争被爆国であり、世界中の注目と支援を集めることとなった東日本の震災と原発事故を経験した日本にあるからこそ、世界に向けて確かな福音の証しと平和への執り成しを祈る意味があ

るだろう。被造物全体の救いが求められ、キリストの教会はそのための使命をいただいている。

一六世紀の宗教改革は、時代の苦悩に対する福音の深い洞察とまた確かな信頼、そしてその宣教を教会のなかに呼び覚ますものだったといえよう。現代の中で、私たちが教派を超えて結び合うことを、この脈絡のなかに捉えたいのだ。

【長崎から】

浦上は、奇しくも今年あの浦上四番崩れから一五〇年の時を迎えている。キリシタン迫害の歴史には、人間の権力が霊的存在としての人間の魂に対する暴力が刻まれている。長崎では、それでも信仰は重ねられてきた。生きられた信仰がある。その「ナガサキ」が、しかし今度、帝国主義にかられた国家のもたらした戦争の悲劇のなかで再び被爆を経験することとなったのだ。

今年、ここにカトリック、ルーテルの信仰者が共に集い、私たちの歴史に深く心を置き、それにも拘らず主の恵みの導きがあったことを知り、共に神の平和の宣教のために祈りを合わせる。

宗教改革五〇〇年は、単なるお祭りではない。この共同記念は神の出来事の一つの証しになると信じていたい。私たち自身が、教派を超えてキリストに生きるものとして、その神のみ業に与り、また、その証人となる。

前号記事の訂正とお詫び

ルター研究所所長 鈴木 浩

前号（「ルター研究所ニュース」第六八号）で、大森教会の竹田牧師が描いた切り絵、「聖書を翻訳するルター」を掲載する際に小さな説明記事を書いた。その中で、ルターが訳したドイツ語訳新約聖書、（九月に出版されたので、「九月聖書」と呼ばれている）が有名になり、すぐに売り切れたので、一二月に第二版が出版された、と指摘した。

その関連で、次のようにも記した。「しかし、すぐに売り切れたのであろう。早くも同年の一二月には第二版のルター訳聖書があつて、何年か前に広島経済大学を訪れた際にそれを手にとってみる機会があつた。」

そのように書いたのは、聖書の最終ページに小さな「正誤表」があつたので、

初版の際の誤記を第二版で訂正したと思ひ込んだからである。その後、広島経済大学の図書館から連絡があつて、正誤表のある方が初版の「九月聖書」であることを教えていただいた。わたしのまったくの思い込みに基づく誤記であつた。正誤表がある方が、初版の「九月聖書」であつた。

おそらくは一冊数億円もするだろうこのような貴重な本の場合、初版か再版かでは、その価値が大きく違ってくる。これは、えらいことだと思つて、すぐに図書館に謝罪したが、もともと「研究所ニュース」に載せた記事なので、その訂正と謝罪も同じ紙面にしなければならぬのは、当然のことである。

不正確な理解で記事を書き、図書館には大きなご迷惑をおかけしてしまつた。遅ればせながら、改めて心からお詫びしたい。

研究所ニュース

●ルター研公開講座

前期は江口再起教授による「ルターの生涯」が開かれ、後期は鈴木浩名誉教授による「ルターの神学」（毎週土曜日、2限10:30～12:00）が開講されます。「ルター原典講読【ラテン語Ⅱ】」は『創世記講義』を共に読んでいきます。

●講演と音楽の夕べ

今年の「秋の公開講演会」は特別企画。著名なルター研究者二人の講演に、ムジカ・サクレ・トウキョウの合唱が華を添えます。ぜひともご来場ください。●研究所の所員たちは全国各地での記念の催しでの講演や説教に奔走しています。

ルター研究所 宗教改革500年記念

講演と音楽の夕べ

10月31日（火）午後7時～9時

ルーテル東京教会〔新大久保駅下車、徒歩5分〕

講演1 「95ヶ条の今日の意味」竹原創一（立教大学名誉教授）

演奏 J.S. バッハ「カンタータ 80番」（神はわがやぐら）

ムジカ・サクレ・トウキョウ（山田実氏指揮）

講演2 「宗教改革の核心」

鈴木 浩（ルーテル学院大学名誉教授・ルター研究所所長）

*入場無料・予約不要

主催 ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校 ルター研究所



日本ルター学会 宗教改革500年記念学術大会

10月7日（土）午後1～5時、ルーテル東京教会

講演 「宗教改革の意義～霊性神学からの考察～」金子晴男（聖学院大学名誉教授）

シンポジウム 「宗教改革を多角的視点から考える」阿部善彦・竹原創一・菱刈晃夫・鈴木昇司

*学会員以外の方の参加歓迎【参加費無料】